

1. 教育の責任

昨今、保育士不足による待機児童数の増加や保育所入所年齢の低年齢化による保育士不足が課題となっている。そのような中、保育士養成課程の中での乳児保育を履修する意味は、非常に深い。また、平成31年4月から、平成29年の保育所保育指針の改定を受けて保育士養成科目の一部改正が行われた。その時に、乳児保育は、「乳児保育」(演習2単位)から「乳児保育Ⅰ」(講義2単位)、「乳児保育Ⅱ」(演習1単位)に変更された。

この科目は、「保育の内容・方法に関する科目」に位置付けられ、3歳未満児の保育に対する知識と技術を修得し、本学科における「保育者としての専門的知識や実践的技能を習得し、様々な側面から子どもを理解し、国際・地域社会における今日的ニーズに対応できる人」という学習成果と関連している。

2. 教育の実施における理念

保育者に求められる資質として、最も重要かつ基本的なこととして「子どもが好き」ということである。しかし、子どもが好きだけでは保育者にはなれない。なぜなら、保育者は子どもを育てる責任があるからである。さらに、育てるためには対象を理解しなければならない。一言でいうと、保育者には感性と知性の両方が必要であるということである。つまり、一人一人の子どもが、今、何を思い、何を求め、何を願っているのかを感じ、捉えたエピソードを根拠として説明する力が必要なのである。このような力を身につけるためには、感性を磨き、何事も物事の本質的なところから考え続ける姿勢が必要である。

また、幼稚園教育要領や保育所保育指針に謳われているように、乳幼児期は人の育ちの土台となる重要な時期である。この事を乳幼児期にのみに焦点化して置き換えると、乳児期は乳幼児期の育ちの土台となる重要な時期となる。様々な発達は、土台の上に成り立つものである。つまり、0歳から何をどのようにして積み上げていくとの適当な発達が望まれるのか、そのつながりを捉える視点

が重要だと言える。

「乳児保育」においては、0歳からの積み上げるものは何か、0歳、1歳、2歳とはどのような時期なのかを感覚的・知的に理解することを目標としている。

3. 教育の方法

2で示した理念を実現するために、柔らかい表現を用いたテキストを使用し、DVDや実際の映像を活用し、問いかけを多くすることで、感じて考えることを習慣化できるようにする。また、問いかけにおいても明確な一つの答えを示すのではなく、さらなる課題を示し、考えれば考えるほどに奥が深いことを実感できるように意識した。

4. 教育の成果

学生からの授業評価アンケートでは、「答えを教えて欲しい」や「何を言っているのか分からない」などの懐疑的な回答や「グループ活動をしたい」も見られた。自分なりの工夫のつもりが、学生へは混乱を与える結果を招いた部分もある。半面、「保育や子どもの考え方が変わった」との回答も得られた。レポート課題においては、全員が提出することができたが、内容というより基本的なレポートの書き方が分かっていない学生が目についた。まとめることと自分の考えを述べることとの違いが明確になるような課題を、あえて同時に出すなどし、説明を行った。

評価結果は、秀(35%)、優(22%)、良(14%)、可(29%)と半数以上が秀と優であるが、可も3割いる。

5. 教育の目標

今後は、演習活動をより多く取り入れ、感覚的な理解を文字化することで考える力をさらにつけていきたい。また、見せる映像の選択の幅を広げ、子どもの育ちとは何か、子どもとは何かについて視覚的刺激からのアプローチに取り組みたいと考えている。

授業公開においては、乳児保育で行う土台づくりの重要性が良く分かったが「学生のメモを取る姿があまりなかったことが残念である」とも言われた。